

司 式 熊田雄二牧師

奏 楽 門脇陽子姉妹

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 4:1 天地にまさる神の御名を

あめつちにまさる神の御名を ほむるにたるべき心もがな アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 72:1 心を高くあげよ 主の御声に従い

ただ主のみを見上げて 心を高くあげよ アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 5 使 徒 信 条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマ

リアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、としえの命を信ず。 アーメン。

献 金 (黒) 神学校日 (赤) 神学校日 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

《 子どもプログラム 担当：森永美保執事・那珂百合子姉妹 》

聖書朗読 ルカによる福音書8章1～3節 (新約聖書117頁)

説教・祈祷 「婦人たちの奉仕」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 103 日々主はそばにいまし

- 1 日々主はそばにいまし 悩みに勝つ力 全ての重荷を負い 慰め助けたもう
愛に満てる御神は恵みを日々与え 悩み苦しむ時も 憩いと安きたもう
- 2 悩み激しき時も 主の約束頼み 安けく過ぎゆくため 主よ御言葉たまえ
疲れし時に助け 御手にすがる我を 常に導きたまえ 御国に入る日まで
アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天のごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63 天地こぞりて

あめつちこぞりて かしこみ讃えよ
み恵みあふるる 父・御子・御霊を アーメン

* 祝 禱
後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老 (司会・受付 次週：門脇陽子長老)

本日 受付 1階：佐藤紀子執事 2階：藤井牧子執事／動画：大日南信也執事 録音：番場駿也兄弟
次週 受付 1階：藤原宏章執事 2階：大日南隆夫執事／動画：大日南悠兄弟 録音：森川莞太兄弟

I 神の国の福音

1節のことは、今も続いている出来事です。「すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。」神の国は天国とも言われますが、「天国はあなたがたのただ中にある」と、主イエスは言われました。ですから、福音を信じる者の心の中にあります。福音とは、救い主によって、罪の赦しと与えられることと、永遠の命が与えられることの良い知らせです。罪の赦しと永遠の命が与えられて神の子とされる、良い知らせです。神の国には神の子たちが入るのです。

イエス様は十字架に付けられてしまいましたが、復活して生きておられ、今も「神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせ」ておられます。聖霊の働きによって、世界中すべての「町や村を巡って」おられます。

そのことはルカ文書第二巻『使徒言行録』に生き生きと語られています。使徒たちに聖霊が降って、キリストの弟子が「町や村を巡って旅を続け」ました。特に異邦人伝道となると、使徒パウロが伝道旅行を3回行ないました。それでも、主役は、パウロではなく、聖霊です。パウロは「町や村を巡って」教会が立てられて行きましたが、教会のかしらはいつでもキリストです。

そして「町や村を」巡る順番は、日本にもやって来ました。小さな上福岡の町にも来ました。最初はアパートの一室で、それから上福岡3丁目の教会で、そして今は鶴ヶ岡1丁目の教会で、「イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせ」ておられます。

そこで、教会は、建物に十字架が付いていてもいなくても、キリストのからだなる教会です。キリストが主でありブドウの木であり、私たちはその枝です。そしてキリストは、「神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせ」ることを、弟子たちを用いてなさいます。だから、今、私たちは用いられています。伝道開始以来59年間、すでに召された伝道者や信徒と共に用いられてきました。

II 福音を告げ知らせる弟子たち

さて、きょうの聖書箇所は、4人の福音書記者の中でルカだけが記しています。イエス様の宣教活動のお供をした女弟子のリストですが、こういうところがルカらしいと言えます。イエス様と十二弟子たちの食事はどうしたのか、栄養管理は誰がしたのか、医者であるルカは見逃しません。

そしてその女たちは「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち」がリストの筆頭です。それに加えて「そのほか多くの婦人たち」です。「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」ので、喜んでするヴォランティアです。

そのリストの中で、いちばん気になるのは、やはり「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」でしょう。この箇所の小見出し「婦人たち、奉仕する」の前の話の小見出しは「罪深い女を赦す」ですので、その「罪深い女」が「マグダラのマリア」だろうと考えるのは、ごく自然な流れです。その「罪深い女を赦す」という小見出しのエピソードも、ルカだけが記しています。ですから、女弟子のリストの筆頭に「マグダラのマリア」を挙げるためのエピソードとも考えられます。

「マグダラ」はガリラヤ湖の北にある町ですので、「マグダラのマリア」と言われます。イエス様はガリラヤ湖の西にあるナザレでお育ちになりましたので、「ナザレのイエス」と言われました。日本でも江戸時代までは、庶民に名字などなく、「柴又のトラさん」とか「上福岡のクマさん」とか言っていました。

Ⅲ 七つの悪霊

この段落の始めに「すぐその後、」とあるので、前のエピソードから続いている話というのは自然な流れです。正確に言うと「すぐ」という言葉はないので、2年前に出た『聖書協会共同訳』では「その後」と訳しています。もっと厳密に言うと複数形ですので「これらの後」です。「これら」とは、それまでに述べたいろんな癒しや赦しでしょう。さらにギリシャ語本文ではもともと章や節はないので、7章と8章の区切り目はありません。続いている話です。

さて、問題は「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」という長い名前の言い方です。当然ながら、「七つの悪霊」とは何かということに興味シンシンとなる人たちが出て来ました。変な小説や映画も出て来ました。その「七つ」とは何なのか、「七つの悪霊」の一つ一つはどんな悪霊か、調べたくなる人たちが出て来ました。

調べたくても、聖書の中に出てくる悪霊の名前は七つもありません。ベルゼブルが新約聖書に出て来ますが、サタンの部下のようです。聖書だけでは七つも出て来ないとなると、聖書以外の書物を調べたり伝説から考えたりするようになります。それは不健全だと、医者ルカなら分かるでしょう。悪霊のことばかり調べて考えるのは精神的に不健康です。そもそも、聖書以外の書物や伝説に長時間お付き合いすること自体、不健全です。

そこで「七つの悪霊」とは、聖書にある七つの罪だと考える人たちもいます。十戒から七つ選ぶか、イエス様が「人間の心から悪い思いが出てくる」と言って挙げられたリストから七つ選んだりします。マルコ1：20-22には「みだらな思い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである」というリストからですが、数えてみると12あります。しかし「・・・など」と言っておられるので12以上あり、罪は数えきれないのです。

また、パウロが挙げるリストから七つ取り出すことも考えられます。「肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもので（ガラテヤ5：19-21）。これも数えてみると15ありますが、「その他このたぐい」と言っていますので15以上あり、罪は数えきれないのです。

ですから、7という数字に意味があると思って調べたり考えたりすること自体、不健全な方向への入口になってしまいます。聖書のみで考えるなら、やはり、直前に記したエピソード「罪深い女を赦す」ということからの続きで考えた方がよさそうです。

Ⅳ 罪のリスト、恵みのリスト

そのメッセージは、7章47節でイエス様が言われたことにあります。「この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」と。ですから、婦人たちのリストは、8章の2節によると「悪霊を追い

出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち」です。「マグダラのマリア」の他に「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ」が具体的に名前を挙げられています。

そしてそれは、すべてのクリスチャンに当てはまりますから、「マグダラのマリア」とは、私でもあり、あなたでもあります。そこに自分の名前を置き換えてみましょう。すると、「この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」と、イエス様が言われたことが、自分にも当てはまるでしょう。

「数えてみよ、主の恵み」という聖歌がありますが、まず自分の罪を数えてみましょう。すると、「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた」自分に気が付きます。そして、その数だけキリストの恵みも数えることができます。そうすると、イエス様の声が聞こえてきます。「多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」。

罪とは魂の病気ですから、自分の罪の種類や傾向を多く瞑想することは幸いです。昔犯した罪、今もくすぶっている罪、そこにキリストの恵みも働きます。罪が増し加わるところにはキリストの恵みもまた増し加わって、キリストの十字架と復活の力が働きます。そして、だんだん古い自分に死んで新しい自分に生きる魂が鍛えられると、喜びが増し加わっていきます。

この喜びに満たされると、キリストを宣べ伝えずにおれない思いにされます。ですから、リストに挙げられた婦人たちは、ただ物を出し合って奉仕しただけではありません。イエス様一行と一緒に「神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせ」たのです。